

始動。

光免疫療法センタースタート

INDEX

巻頭 特集

光免疫療法センタースタート

■ 附属病院

新病院長ご挨拶	松田 公志	03
新任教授に聞く	木下 秀文	05
新任教授に聞く	覚道 奈津子	06
新任教授に聞く	森川 守	07

■ 総合医療センター

心臓血管病センター	川副 浩平	08
	駒井 宏好	
	山本 克浩	
	高木 雅彦	
	安元 浩	
人工関節センター	徳永 裕彦	09
骨盤機能センター	徳原 克治	10
血管造影・IVR	米虫 敦	11

■ 香里病院

乳腺センター	綿谷 正弘	12
新任部長に聞く	高岡 亮	14

■ くずは病院

病院長に聞く	高山 康夫	15
地域医療連携課	吉岡 克治	16
ケアプランセンター	杉原 友樹	17

■ 天満橋総合クリニック

新任医師に聞く	大宮 美香	18
---------	-------	----





光免疫療法センター始動

附属病院において、2020年11月に保険収載されたがん光免疫療法を実施する「関西医科大学附属病院光免疫療法センター」が、4月1日(木)付で設置・始動しました。

これは、アメリカ国立衛生研究所(NIH)主任研究員・小林久隆氏(2022年4月開設「関西医科大学附属光免疫医学研究所」所長就任予定)が開発した全く新しいがん治療戦略「光免疫療法」を担う組織で、毎週水曜午前に専門外来を開設し、光免疫療法の適応判断を行うとともに、本治療についてのご説明を行っております。また、すでに本治療を患者さんに施行し、経過を観察しているところです。

光免疫療法は、手術療法・化学療法・放射線療法・免疫療法に続く「第5のがん治療法」として注目を集める画期的な治療法です。この治療では、まず光感受性薬剤を注射します。この薬剤は正常なヒト組織にはほぼ害を与えませんが、もっぱら腫瘍(がん)細胞に吸着し、さらに、近赤外光が照射されると励起して殺腫瘍性作用を発揮します。そこでこの薬剤の注射のち、腫瘍へ近赤外光を当てることによって、がん細胞を破壊します。

現在のところ本治療法は、先行する各種治療で効果がなく、また、遠隔転移のない頭頸部がん(舌がん、口腔がん、咽頭がん、喉頭がん、鼻副鼻腔がんなど)に限り行われていますが、将来は「頭頸部がん」や「転移なし」、「先行治療歴あり」に限らない色々ながんにも適応の広がることが期待されています。

光免疫療法センターの設置によって、光免疫療法の提供だけでなく、症例データの収集も可能となり、難治性再発頭頸部がん以外のがんにも保険適用できるよう、安全性の向上や術式の改善など、様々な面で研究を進めることが可能となります。

また、前述のごとく、2022年4月には関西医科大学に「附属光免疫医学研究所」が設置される予定で、光免疫療法センターで患者さんの治療にあたりると同時に、光免疫療法のさらなる発展を目指した研究を行います。

光免疫医学研究所は光免疫療法に関する基礎研究と臨床治療のサポートを行う研究所として、最新機器および環境を整備し、日本における光免疫療法の中心研究拠点となる施設を目指して

診療の流れ

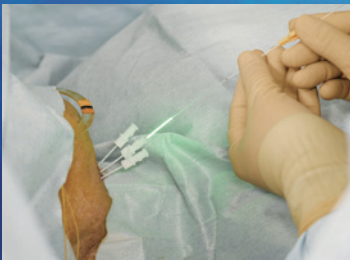
当センターの外來を受診していただき、
光免疫療法の適用が可能かどうかを診察します。

入院
1日目

治療初日に2時間以上かけて光免疫療法用の薬剤
(商品名:アキラルックス®)を点滴投与します。

入院
2日目

薬剤の投与20~28時間後(2日目)にレーザー光を
照射します。1か所につきレーザー光を5分程度照射し、
全体で2時間程度あれば終了します。



入院
3日目
以降

治療回数は治療効果に応じて1~4回です。
治療効果が不十分な場合は、4週間以上の間隔を
空けて、最大4回まで治療することができます。



対象とならない可能性のある方

- ・アキラルックス®に含まれる成分に対してアレルギー反応があらわれたことがある方
- ・がんが頸動脈(首の左右にある太い血管)まで広がっている方

その他よくある質問などは附属病院webサイトの
光免疫療法センターページをご覧ください。



診療スタッフ

センター長



耳鼻咽喉科・
頭頸部外科学講座 教授

岩井 大



耳鼻咽喉科・
頭頸部外科学講座 講師

藤澤 琢郎



耳鼻咽喉科・
頭頸部外科学講座 助教

鈴木 健介

当センターへ患者さんをご紹介いただく場合

当センターでの光免疫療法をご検討の場合は、地域医療連携部へご連絡ください。

地域医療連携部：TEL.072-804-2742

います。
関西医科大学校方キャンパスの医学部棟内に設置されること
なっており、2022年4月の開所時は、光免疫療法に関する基
礎的検討を行う基盤技術開発部門と、光免疫療法に伴い起こる免
疫反応についての詳細な解析を行う免疫部門の2部門を設置し、
スタートします。その後、第3部門の設置およびスタッフの増員を
行い、徐々に研究所を拡大していき、最終的に光免疫医学研究所
には3つの研究部門を設置し、スタッフは総勢30名程度の規模と
なる予定です。

全ての患者さんに
 ご満足いただくために、
 進化を止めない病院であり続けます



New Hospital Director
新病院長 ご挨拶

profile

- 1978年3月 京都大学医学部 卒業
- 1986年11月 京都大学医学部 泌尿器科 助手
- 1991年9月 関西医科大学 泌尿器科学講座 准教授
- 1995年6月 関西医科大学 泌尿器科学講座 教授
- 2010年4月 関西医科大学枚方病院 副病院長
- 2012年4月 関西医科大学 副学長
- 2015年4月 学校法人関西医科大学 評議員・理事
- 2015年11月 国際泌尿器内視鏡学会 理事長
- 2021年4月 関西医科大学附属病院 病院長

関西医科大学附属病院
 病院長

松田 公志

Tadashi Matsuda



ご挨拶

令和3年4月に関西医科大学付属病院の病院長に就任いたしました、松田公志です。病院長就任前は、泌尿器科医としてがん患者さんに対する腹腔鏡手術やロボット支援手術を専門にしておりました。特に腹腔鏡手術については世界的にもまだ症例が少なかった1990年初頭から携わり、さまざまな手術法を開発してまいりました。

さて、技術革新によって医学領域にもロボットやAIなど新しい技術が

次々と生まれ、本院でも導入していますが、診療において日々実感するのは、医療は人と人の関わりであるということです。病気を治すだけでなく、治療・対応にご満足いただきたい。常に「まじめに、丁寧に」を第一に心がけ、体の不調に苦しむ患者さんの心に寄り添い、向き合うことを大切にしていまいりました。病院に寄せられるご意見やスタッフへのメッセージも、いつも大切に拝見しております。感謝のお声をいただくことも嬉しく、またご指摘やご意見は真摯に受け止め、スタッフと共有して改善に努めております。

北河内医療圏の中核施設として

本院の理念は、関西医科大学の建学の精神「慈仁心鏡」すなわち慈しみ・めぐみ愛を全職員が心の規範とし、安全であたたかい、患者さんに寄り添った最善の医療の提供です。そして本院の使命は、地域のクリニックや連携病院の先生方との連携の下、持ちうる機能をフルに発揮して地域医療に貢献することです。北河内医療圏内における唯一の特定機能病院として、密な病診連携によりスムーズな医療サイクルを維持し、地域医療の質を上げていく。細分化された45の診療科と、各診療科の専門医が集い

横断的・集学的治療を行う各種センターで、あらゆる面から一人ひとりの患者さんに最適な医療を行う環境を備えております。本院の診療機能の向上と地域医療機関との強い連携が北河内エリアの方々の暮らしを支えることに繋がると心得て、各診療科の医師、地域連携部のスタッフが丸となり日頃から体制づくりに励んでいます。

別館の建築とスマート病院化について

枚方市に本院が開院して、早15年が経ちました。近年の患者数と手術件数の増加を受け、より余裕のある診療体制をつくるべく、別館建築計画が進んでいます。

令和6年度に敷地内に別館をオープンし、令和7年には本館のリニューアルを予定しています。具体的には手術室を現在の19室から24室に(将来的には29室まで)増設し、ICU(集中治療室)、HCU(高度治療室)も増床。外来診療スペースを大幅に拡張し快適な受診環境を確保するとともに、入院支援センターを整備し、入院時から退院後のことを患者さんと共に考える体制を強化します。これらは、高度急性期病院である本院の機能をより密度の高い治療として一人でも多くの方に活用いただく

ことが狙いです。また、病院のスマート化についても検討を始めており、ロボットによる物品搬送、患者さんにとってストレスのない受診環境、さらには職員の業務効率や診断治療精度の向上を目指し、院内設備や受診システムのIT化、そしてAIの導入も推進する予定です。

本院のがん治療に新たな展開を

がんは日本人の死因の第一位であり、罹患者も増加傾向にあることから、本院でもがん治療にさらに力を入れていくことが必要と考えています。治療法には手術、放射線治療、抗がん剤、免疫療法など多くの選択肢があります。近年は各診療科において低侵襲な腹腔鏡手術を多数実施しています。また放射線科では新しい技術を積極的に導入し、それぞれの患者さんに最も適切なタイプの放射線治療を行う体制が整えられています。

さらに今年度の大きなトピックスとして、光免疫療法センターを開設しました。米国NIHの小林久隆先生が開発された光免疫療法「頭頸部イルミノックス治療」(保険適応)を行うことが可能です。これは現在、頭頸部がん(舌がん、口腔がん、咽頭がん、喉頭がん、鼻副鼻腔がんなど)の

みが対象ですが、令和4年に関西医科大学付属光免疫医学研究所が完成した暁には、様々ながんに適応されるような新たな治療法を共同開発していく予定です。

がんの治療法や薬剤は目覚ましく発展し、その分治療も複雑化しています。本院では、がんセンターを中心に、専門性の高い医師が集まり、個々の患者さんに最も適切な集学的治療を行う体制を強化してまいります。

全ては患者さんのために

もし患者さんの治療がかかりつけ医で完結できるならば、それに越したことはありません。ただ、地域の先生方の専門領域と違ったり、設備的に処置が難しかったりという場合は、本院が受け入れて最善の治療を提供いたします。本院はモットーとして「患者さんの受入を断らない病院であること」を掲げています。治療を終えた時点で地域の先生方の元へお戻りいただく。そして何かあればまたご紹介いただく。これらは全て、患者さん一人ひとりにより良い医療を提供するためです。患者さんにとって、少しでも快適に通院・療養していただける病院であるよう、今後も職員一丸となって努力してまいります。



低侵襲手術の実践と、 患者さんの生活の質を

重視した診療を進めています



私はオンコロジー(腫瘍学)を専門とし、前立腺癌をはじめ、泌尿器生殖器腫瘍の診療を専門分野としています。手術療法では、低侵襲な腹腔鏡手術、ダヴィンチによるロボット手術や前立腺肥大症に対するレーザー治療(HOLEEP)を得意としています。関西医科大学に着任して15年以上が経ちましたが、これまで地域の先生方と連携できる関係を築けていること、大変ありがたく感じております。

当科は日本でも最初に腹腔鏡手術を始めた泌尿器科の一つであり、2013年からはロボット手術を導入しています。また当科の手術件数は2020年度実績で1,185例と、北河内エリアのハイボリュームセンターとして機能しています。腎泌尿器

外科領域で扱う疾患の内容は多岐にわたりますが、全ての患者さんに質の高い医療を提供するために若手医師を中心とした教育や診療のバックアップ体制に力を入れています。全員参加のカンファレンスや勉強会を毎日行い、難しい症例については必ず検討会を開きます。最新技術を積極的に取り入れているだけでなく、当科の医師全員が質の高い診療を行える体制を構築しています。多くの医師が移植や小児泌尿器、女性泌尿器や泌尿生殖器がん治療などサブスペシャリティ領域の専門医を取得している点で安心してご紹介いただける環境と自負しております。多くのスタッフが、腹腔鏡技術認定医の資格や、がん治療認定医の資格を取得しています。

資格を取得しています。

病気の治療法も人々の暮らしも多様化している中、一人ひとりにマッチした治療法を選ぶことは大変重要なステップであると私たちは考えます。特に泌尿器外科にかかる患者さんは高齢の方が多く、体力や生活背景が人によって大きく異なります。私たちは患者さんだけでなく、患者さんを支えるご家族にもご安心、ご満足いただける医療の提供に努めることをお約束いたします。

このたび腎泌尿器外科の主任教授を務めることになり、地域の先生方とは、これまで以上に密な連携を心がけ地域医療へ貢献していく所存です。技術発展が著しい現代社会において、そう遠くない未来、地域医療は地域全体が一つの病院のような機能を備えていることが自然な流れとなるでしょう。ますます高度化、多様化していく医療の現場で、常によりよい医療の在り方を模索してまいります。



「ダヴィンチ」によるロボット手術

New Professor 新任教授に聞く

profile

- 1988年3月 京都大学医学部 卒業
- 1988年6月 京都大学医学部附属病院 泌尿器科 研修医
- 1990年4月 倉敷中央病院 泌尿器科 医員
- 1996年11月 米・Wisconsin州立大学 Madison校 リサーチフェロー
- 1999年7月 大阪赤十字病院 泌尿器科 医員
- 2000年4月 京都大学医学部附属病院 泌尿器科 助手
- 2003年4月 京都大学医学部 講師
- 2004年4月 関西医科大学 腎泌尿器外科 准教授
- 2014年8月 関西医科大学附属病院 病院教授
- 2021年4月 関西医科大学 腎泌尿器外科 主任教授

関西医科大学附属病院
腎泌尿器外科 診療部長

木下 秀文

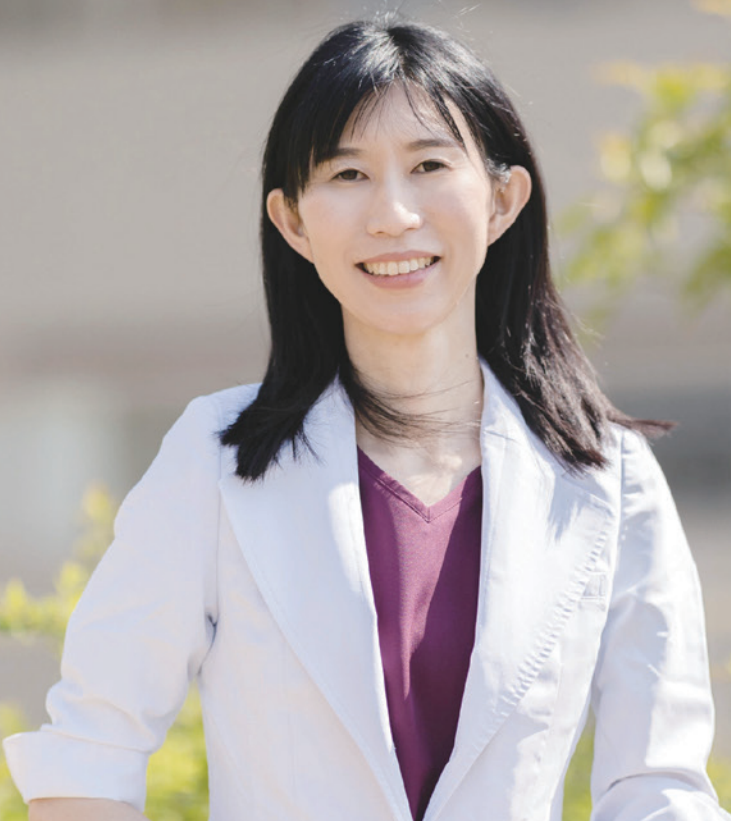
Hidehumi Kinoshita



地域連携の絆を大切に

機能と整容性の両立した

形成外科を目指します



2021年4月、形成外科の診療部長に就任いたしました。

私が形成外科医を目指したのは、大学の授業で腫瘍切除後の顔面特殊皮弁の再建を見て、機能性と整容性の両面から患者さんを助けられることに感銘を受けたからです。

大学院では脂肪幹細胞の機能解析、多血小板血漿を用いた創傷治癒と再生医療への臨床応用をテーマに研究を行い、これまで形成外科学の教育、研究、臨床に携わってまいりました。

顔面の眼瞼、鼻、口、耳および被髪頭部に対する機能と整容性を両立した再建治療を得意とし、臨床研究を行ってきた多血小板血漿の潰瘍治療については、2020年度より保険適応が承認されたことを受けて、本附属病院で治療を行えるように準備を進めていきます。

さて、形成外科では皮膚の腫瘍や生まれつきの変形、難治性潰瘍、褥瘡、やけどや顔面骨折など、頭の先から足先まで全身の体表を対象とします。

さらに当院形成外科の強みは、各分野のエキスパートが集まっており、形成外科領域のほぼ全ての疾患、病態に対応できることです。手術だけでなく、皮膚レーザー治療も先進の4機種（色素レーザー、Qスイッチルビレーザー、炭酸ガスレーザー、脱毛レーザー）を備え、積極的に取り組んでいます。

当科は比較的新しい診療領域とい

うこともあり、どのような疾患を診療できるか、どういった患者さんをお任せいただけるのか、まだ周知できていない点に課題があると感じております。今後、積極的な情報発信も大きな使命の一つとして取り組んでまいります。

地域の先生方におかれましては、患者さんの傷が治りにくくてお困りの際や、体表の疾患について治療を迷われた際など、体表に関わるどのようなことでもお気軽にご相談ください。私たちの形成外科診療における種々の治療、手術およびレーザー治療が患者さんのお役に立つことを心より願っております。

形成外科はこのような疾患を扱っています



- ・外傷(ケガ、やけど) ・潰瘍
- ・床ずれ(褥瘡) ・傷あと、ケロイド
- ・皮膚や皮下のできもの(良性腫瘍・悪性腫瘍)
- ・生まれつきの変形
(唇裂、口蓋裂、小耳症、多指症合指症など)
- ・事故による組織欠損、他科での腫瘍切除手術後
(乳房再建、顔面や食道、咽頭、喉頭)の再建手術
- ・各種皮膚レーザー治療(一部自費治療)
- ・眼瞼下垂、シミ、シワの抗加齢治療(一部自費治療)

救命救急センターとの連携で、重症熱傷や顔面外傷・骨折の治療、切断指再接着も行っています。

New Professor
新任教授に聞く

profile

- 2002年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 2007年5月 英・King's College London, St Thomas' Hospital 形成外科 留学
- 2008年3月 関西医科大学大学院 修了(形成外科学専攻)
- 2008年4月 関西医科大学医学部 形成外科学講座 助教
- 2016年12月 関西医科大学医学部 形成外科学講座 講師
- 2019年12月 関西医科大学医学部 形成外科学講座 准教授
- 2021年4月 関西医科大学医学部 形成外科学講座 主任教授、診療部長

関西医科大学附属病院
形成外科 主任教授、診療部長

覚道 奈津子

Natsuko Kakudo



「母体搬送を断らない」を目標に、
地域の周産期医療の中核として
さらなる安心を提供します



2021年4月より、当院の産科担当診療教授に就任いたしました。これまで北海道で25年以上、周産期を中心に、特に内科疾患合併症妊娠、分娩後の出血・血栓塞栓症、胎児診断・胎児治療を専門分野として臨床・研究を行ってきました。日本産科婦人科学会では、産婦人科診療ガイドライン産科編の作成委員を6年間務め、今年度からは周産期委員会委員ならびに産婦人科診療ガイドライン産科編の評価委員を担当しております。産科診療の標準化とさらなる発展のため、臨床に根付いた疫学研究をもとに新たなエビデンスの発信に努めています。このたび、人生初となる関西とのご縁に嬉しく思っております。

さて、産科はいかなる状況下でも「安全」であることが第一優先です。着任してすぐの5月、本院は胎児治療の「無心体双胎焼灼術（内視鏡的胎盤吻合血管レーザー焼灼術）」「胎児輸血」「相対間輸血症候群治療」について厚生労働省近畿厚生局より施設認定を受け、6月には無心体双胎焼灼術の手術を行いました。総合周産期母子医療センターを有する当科が北海道内医療圏でもっと信頼を寄せていただけるよう、体制強化と診療レベルのさらなる向上に貢献してゆく所存です。また、臨床と研究のサイクルを強化すべく、若手医師が学会発表や

論文発表する機会を多く持てる環境も整えてまいります。

地域に向けては、先生方との勉強会はもちろん、アドバンス助産師の方への必須研修、ステップアップ研修なども実施する予定を立てており、総合周産期母子医療を提供する地域の中核施設としてオープンな場を積極的に設けてゆきます。先生方に「産科を紹介するなら附属病院」と思っていただけのように尽力してまいりますので、お困りのことがございましたらお気軽にご相談ください。



附属病院では2021年5月に無心体双胎に対するラジオ波焼灼術の施設認定を受け、6月に1例目となる手術を行いました。

New Professor
新任教授に聞く

profile

- 1994年3月 旭川医科大学医学部 卒業
- 2002年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程終了(医学博士取得)
- 2007年1月 仏 CHI ボフシー サンジェルマン・アン・レイ 産科 留学
- 2007年4月 北海道大学病院産科 助教
- 2013年4月 北海道大学大学院医学研究院産科 講師
- 2016年9月 北海道大学大学院医学研究院産科 准教授
- 2021年4月 関西医科大学産科学 婦人科学講座 産科 診療教授、産科科長

関西医科大学附属病院
産婦人科 診療教授

森川 守

Mamoru Morikawa





血管外科 診療部長
駒井 宏好
Hiroyoshi Komai

当科は抹消動脈疾患の治療を中心とした、全国的にも数少ない血管外科の単独診療科です。予防からリハビリまでをモットーに、個々の患者さんの生活スタイルを尊重した診療を心掛けてまいりました。足の閉塞性動脈硬化症には心臓や脳の重篤な合併症が度々経験されるため、見逃すことの無いようこれらの診断にも注力しています。また市民向けのキャンペーンを定期的に行なって、血管疾患の早期発見の重要性を喚起しています。末梢動脈疾患は全身の疾患であり、センターにおける各スペシャリストの連携は、患者さんにとってより良い治療の場であると言えます。



循環器腎内分泌代謝内科 診療部長
山本 克浩
Yoshihiro Yamamoto

当科では、各領域の専門家が協働できるセンターの環境を活かしながら“循環器内科を起点としたタイミングとポイントを外さない治療”を心掛け、腎臓・内分泌代謝内科との連携を強みに、心疾患治療後の二次予防にも積極的に取り組んでおります。心臓救急に対しては救命救急センターと連携して、迅速に対応できる診療体制を24時間365日とっています。虚血性心疾患では、方向性冠動脈粥腫切除術や高速回転式アテレクトミーカテーテルといった高度な技術を用いて、多くの複雑病変のカテーテル治療ができる施設と自負しています。また近々、冠動脈のCT画像データから狭窄箇所の血流を調べるFFRCT解析ができるようになり、患者さんへの負担が軽減できますので、ぜひご利用いただきたいと思っております。



不整脈治療センター センター長
高木 雅彦
Masahiko Takagi

私自身が経験した20年余の不整脈診療と研究活動を活かし、2017年当院に不整脈治療センターを起ち上げました。新しいデバイスを積極的に取り入れ、最先端の医療を提供することを目指しています。特に心房細動に対するカテーテルアブレーションでは、新しい治療法であるクライオバルーンアブレーションを近隣エリアで唯一導入し、増加しつつある高齢患者さんに対する手技の低侵襲化と治療成績の向上を図っています。また難治性の不整脈に対しても3次元マッピングシステム (CARTO、Rhythmia) の施設認定を受けて、より確実性の高い治療を行っています。



心臓外科 診療部長
安元 浩
Hiroshi Yasumoto

当科では、弁膜症や冠動脈疾患、胸部大動脈瘤の手術治療全般を行っており、緊急手術にも対応しています。特に弁形成術を得意とし、その高い施行率を誇っております。近年では低侵襲手術を併用する機会が増えています。これらの高度な手技も知識も、患者さんのQOLに役立つことが大前提で、術後の患者さんの生活を共に考え、より良い治療をお届けすることをモットーとしております。そのためにも患者さんの病状に対し、互いの専門領域で広く、きめ細やかにカバーし合うことができる心臓血管病センターの存在意義は大きいと考えています。



多領域のエキスパートによる
連携で、心臓血管病の
包括的ケアを提供する

当心臓血管病センターは、8年前に血管外科と心臓外科が新設され、4年前に不整脈治療の専門チームができたばかりの若い診療部門です。これからも診療体制の強化を図り、高度急性期医療を提供する地域における役割を果たしてゆきたいと思っています。

さてコロナ禍の2020年、アメリカ、イギリス、日本などで心筋梗塞を含む心臓病の患者数が減少したという報告がありました。今年も同様の傾向が続いているように思われます。患者さんの受診控えは心疾患の重症化に繋がりがかねません。当院ではコロナ感染者とは分離した環境で、一般の診療を制限することなく継続しておりますので、患者さんのご紹介などこれまで通りの連携をお願いできれば幸いに存じます。

Speciality Service 心臓血管病センターのご紹介

関西医科大学総合医療センター
心臓血管病センター
センター長

川副 浩平

Kohei Kawazoe

profile

- 1971年3月 奈良県立医科大学医学部 卒業
- 1971年5月 東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所 外科医療課士
- 1973年5月 東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所 外科助手
- 1978年5月 国立循環器病センター 心臓血管外科 医員
- 1984年7月 国立循環器病センター 心臓血管外科 医長
- 1992年10月 岩手医科大学 外科学第三講座 教授
- 2000年6月 岩手医科大学附属循環器医療センター センター長兼任
- 2003年4月 岩手医科大学附属病院 病院長兼任
- 2006年7月 医療法人誠光会 草津総合病院 病院長
- 2008年9月 財団法人聖路加国際病院 心血管センター長
- 2013年4月 関西医科大学 特命教授、関西医科大学附属滝井病院 (現・関西医科大学総合医療センター)心臓血管病センター センター長
- 2015年4月 関西医科大学総合医療センター 病院長特別顧問兼任
- 2018年4月 関西医科大学附属病院 ハートセンター長、関西医科大学総合医療センター心臓血管病センター長



高度変形や再置換、

また合併症を有する患者さんも

お任せください

これまで30年以上にわたり、滝井の地で診療に携わってまいりました。股関節・膝関節を中心に人工関節の手術は5千例、骨切り手術は500例以上の経験があります。地域の先生方には日頃より病診連携や交流会を通じてお世話になっており、お礼申し上げます。人工関節センターは2013年、地域の医療ニーズを受け、私自身が創設しました。この春より理事長特任教授としてセンター長を務めることとなり、心新たに診療環境の充実に努めますのでよろしくお願いたします。

今、介護保険サービスで要支援となる人の約3割に膝関節の病気があると言われています。人の寿命が急速に伸びる中、人工関節は健康寿命の延伸への選択肢として欠かせない存在であり、人工関節置換手術は関節の痛みをとる手段として最も効果的で安定した手段です。当センターでは術後の行動制限なしに、患者さんが関節を意識しなくて済む生活に戻れるよう全力を尽くしております。

センターの特徴として挙げられるのが、低侵襲手術を多く手がけていることです。低侵襲手術は手術創が小さく（股関節手術でも8cm程度）、日常生活に戻るまでの期間が短い点、また手術による合併症を引き起こしにくい点で優れています。最新鋭の設備環境と、一人ひとりの体に合わせた行う正確な手術手技で、高度な変形をきたした関節症や再置換術も対応いたしますので、痛みにお悩みの患者さんがいらっしゃればご紹介ください。また、内科との連携で合併症を有する患者さんに包括的な治療が行えることも大病院としての強みです。例えば糖尿病患者さんでしたら、内科で血糖値をコントロールしてから手術に臨んでいただき、術後も連携して患者さんを見守ります。



人工関節置換術の術中風景（ナビゲーションシステム使用）
周術期感染を徹底予防するためにクリーンルームで行っています。

股関節や膝関節に痛みを抱えていると、日常生活に制限がかかってしまいます。ご紹介だけでなく、手術が必要かどうか迷われた場合も地域医療連携課へご連絡いただけますと幸いです。通い慣れた先生方のもとへお呼びいただくことを前提に、情報交換しながら患者さんにとって最善の方法をご提案いたします。

Speciality Service 新センター長に聞く

関西医科大学総合医療センター
人工関節センター センター長
理事長特任教授



徳永 裕彦

Hirohiko Tokunaga

profile

- 1981年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1982年5月 関西医科大学 整形外科科学教室 入局
- 1983年2月 関西医科大学 整形外科科学教室 助手
- 1983年3月 奈良県大和高田市立病院 出向
- 1985年3月 奈良県大和高田市立病院より帰向
- 1985年4月 関西医科大学大学院 入学
- 1989年3月 関西医科大学大学院 修了
- 1989年4月 関西医科大学 整形外科 助手、
関西医科大学附属病院（現・総合医療センター）勤務
- 2001年10月 関西医科大学 整形外科科学講座 講師
関西医科大学附属病院 輸血部 部長併任
- 2009年8月 関西医科大学附属病院 整形外科 准教授
- 2017年4月 関西医科大学 整形外科科学講座 准教授、
関西医科大学総合医療センター 整形外科 部長
- 2017年5月 関西医科大学総合医療センター 整形外科 教授
- 2021年4月 関西医科大学 特任教授、
関西医科大学総合医療センター 人工関節センター長



従来のセンター体制を強化。

大腸がんのスペシャリストとして

LARSに苦しむ人を減らしたい

骨盤機能センターでは外科を中心に婦人科や泌尿器科が連携し、便失禁・尿失禁に関わる機能的な問題、骨盤臓器脱などの器質的な不具合を横断的に診療します。特に当院では便失禁に対する特徴的な治療「仙骨神経刺激療法」で日本有数の実績を誇っています。また便秘にお困りの患者さんの治療も行っております。例えば地域の先生方の患者さんについて、薬の処方での便秘の改善が見られない時はお声がけください。お一人ずつに適した治療法を提供し、先生方のもとへお帰りいただけるよう努力いたします。

私自身は現在大腸がんを専門としておりますが、小児外科領域の鎖肛（直腸肛門奇形）やヒルシウスブルング病といった先天性疾患の治療実績もあり、骨盤内臓器の臨床解剖の専門家としてこれまで経験を積んできました。中でも一番得意とするのが、直腸がんの腹腔鏡手術です。従来、肛門に近い直腸がんや肛門管がんの手術では肛門ごと取り去る手術（直腸切断術）がメインでしたが、当院では

肛門を残す「超低位前方切除術」や「括約筋間直腸切除術」を積極的に施行しています。ただ、どれほど精度の高い手術を施行しても、残念ながら肛門温存手術後に排便障害（LARS）や排尿障害を抱える方はいらっしゃいます。当院の患者さんのみならず、術後の日常生活で苦しむ

を抱える方々の症状緩和に貢献したい。その思いから、センター長への就任と同時に、より適切な治療法を提供するシステム構築への取り組みを始めました。まず4月より、直腸がんの術後にLARSを患う患者さんに対してQOL評価制度を導入し、いただいた評価を常に臨床現場へフィードバックしています。今後は排便状況のより客観的なデータを取得できるよう、直腸の内圧測定なども導入する予定です。

これまでの骨盤機能センターとしての体制をベースに、直腸がん患者さんへのケアも強化してまいりますので、改めてお見知りおきいただけますと幸いです。当院がもっと皆さんによりこんでいただける病院となるよう、引き続き尽力してまいります。



Speciality Service
新センター長に聞く

profile

- 1996年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1996年5月 関西医科大学 外科 入局
- 2008年4月 関西医科大学附属枚方病院(現・附属病院)外科 助教
- 2012年4月 関西医科大学附属枚方病院(現・附属病院)外科 診療講師
- 2014年4月 関西医科大学附属滝井病院(現・総合医療センター)外科 診療講師
- 2015年5月 関西医科大学総合滝井病院(現・総合医療センター)外科 講師
- 2016年5月 関西医科大学総合医療センター 外科 病院准教授
- 2017年4月 関西医科大学総合医療センター 地域医療連携部 部長
- 2021年4月 関西医科大学総合医療センター 骨盤機能センター センター長

関西医科大学総合医療センター
骨盤機能センター センター長

徳原 克治

Katsuji Tokuhara





血管造影・IVR

インターベンショナルラジオロジー

日本語で「画像下治療」と訳すIVR。血管造影の技術を利用した高度な処置が可能です。X線透視・超音波・CTといった画像診断を用いながら、カテーテルなどの器具を用いて遠隔操作で検査や治療を行います。

総合医療センターでは最新のIVR装置、処置技術の導入を積極的に進めています。

IVRでは外科手術のような切開をせずに臓器や血管の診断・治療が可能です。体への負担が少なく低侵襲なことが強みであり、がん診療や腫瘍の組織診断、救命救急センターでの出血治療などさまざまな領域で幅広く活躍しています。当院では現在、3台のIVR装置が稼働中。中でも昨年秋季に導入したバイプレーンIVR・CTは、前後像・左右像のレントゲン撮影に加えてCT撮影も同時に可能で、頭部から足先までいかなるIVR診療にも対応できる最先端のシステムです。ここで、IVRが特に役立てる診断・治療について代表的なものを紹介します。

当院では放射線科だけでも年間425件（2018年度実績）のIVR診療を実施し、消化器系や脳血管系など関連領域でも高い実績を誇ります。私自身は研修医時代からずっとIVR一筋でキャリアを積んできており、若手医師の育成にも力を入れてまいりました。IVR診療でお役に立てそうな患者さんがいらっしゃれば、ぜひ関連各科にお声がけください。

Speciality Service

関西医科大学総合医療センター
放射線科 講師

米虫 敦

Atsushi Komemushi



profile

- 1997年3月 関西医科大学 医学部 卒業
- 1997年4月 関西医科大学 放射線科 研修医
- 1997年8月 米・テネシー州
East Tennessee State University
James H. Quillen College of Medicine
Exchange Student Clinical Clerkship Program 修了
- 1998年7月 りんくう総合医療センター
市立泉佐野病院 放射線科 レジデント医師
- 1999年6月 関西医科大学 放射線科 研究医員
- 2002年4月 関西医科大学 放射線科 医員
- 2002年10月 関西医科大学 放射線科 助手
- 2003年12月 米・テキサス州 The University of Texas
M.D.Anderson Cancer Center, Diagnostic
Radiology Department, Experimental Section,
DUNN LABORATORY 留学
- 2004年4月 関西医科大学 帰向
- 2007年4月 関西医科大学 附属滝井病院 放射線科
- 2016年4月 関西医科大学 附属滝井病院 放射線科 病院講師
- 2016年4月 関西医科大学 放射線科 診療講師
- 2019年3月 関西医科大学 放射線科 講師

CVポート(静脈ポート)

皮膚下に器具を埋め込み、心臓近くの静脈にカテーテルを留置させることで、必要時のみ栄養や薬剤を簡単に注入できる新たな点滴システムです。例えば腕からの点滴が難しい患者さんや、従来の中心静脈カテーテルで絶えず点滴する状態に不自由されている患者さんにメリットがあります。また在宅医療において、高カロリー点滴は往診時、抗がん剤治療は当院への外来でといった活用もできます。当院では日帰り手術で処置が可能です。

子宮動脈塞栓術(UAE)

子宮筋腫の治療法の一つ(保険適応)で、子宮全摘に抵抗がある患者さんに向けた選択肢です。子宮動脈に挿入したカテーテルから塞栓物質を注入し、子宮筋腫に栄養を送る血管まで到達させることで、筋腫を縮小させることができます。

CTガイド下生検

肺や腹腔内に腫瘍が発見された際、CTガイド下で腫瘍の細胞を正確に取得し、組織診断を行います。



乳腺センターを開設。

「乳腺疾患なら香里病院へ」

そう思っていただけ

地域の核的存在を目指します

2021年4月、乳がんをはじめ乳腺疾患全般を集学的に診療する乳腺センターを起ち上げました。多職種が集まり、エビデンスに基づいた良質な医療を機能的に提供することを目的としています。

センター設立の経緯

乳腺センターでは乳腺外科が中心となり、形成外科、放射線科、化学療法科、乳腺専門看護師、薬剤師、そして理学療法士の多職種が密接に連携する体制を整えています。当院では以前から多職種連携の乳がん診療を実施してきましたが、ここで改めて乳腺センター設立に至ったのには理由があります。乳がんは女性のがんの中で最も罹患数の多い疾患であり、その診療は検診を含めた予防に始まり、診断、治療、経過観察、ときには再発治療と長い時間を要します。

2021年2月に国立がん研究センターがん情報サービスから発表されたデータでは、1年間で乳がんと診断された人は約9万2,300人。治療法はめざましく進歩していますが、その分選択肢も広がり、個々の医者と診るよりも集学的な診療体制が必要だと考えました。

そしてもう一つ、現状として、乳がん患者の約半数が60歳を超えています。寝屋川市近隣の地域は長くお住まいの方が多く、住民の高齢化も進んでいるということから乳がん治療への地域ニーズは高いと考えました。患者さんの中には複数の疾患を抱える方もいらっしゃると思います。当センターでは総合病院という特色を生かし、併発疾患

←次ページへ

Speciality Service
乳腺センターのご紹介

profile

- 1978年3月 信州大学医学部 卒業
- 1978年4月 大阪大学第2外科 入局
- 1985年4月 米 National Cancer Institute Visiting Fellow
- 1989年7月 近畿大学第1外科 病院講師
- 2003年8月 近畿大学外科 准教授
- 2008年10月 近畿大学医学部 肺乳腺内分泌外科 教授
- 2011年7月 近畿大学奈良病院 乳腺内分泌外科 教授
- 2019年4月 医療法人医誠会病院 乳腺内分泌外科 部長
- 2021年4月 関西医科大学香里病院 理事長特命教授、乳腺センター センター長

関西医科大学香里病院
理事長特命教授
乳腺センター センター長

綿谷 正弘

Masahiro Watatani



を抱える患者さんの受入も積極的に
行っています。

もちろん乳がん以外に乳腺疾患全般も診療しています。乳腺炎や良悪性の鑑別を必要とする乳腺疾患の治療、トモシンセシス、超音波検査、針生検、ステレオガイド・超音波ガイド下マンモトーム生検を駆使した乳がん検診の二次精査もお任せください。

最新式マンモグラフィ 撮影装置を導入しました

センターの開設にあたり、新たに導入した装置についてもご紹介いたします。乳房のレントゲン検査でよく用いられるのがマンモグラフィです。マンモグラフィ検査の良いところは、小さながん組織も見逃さないということと、マンモグラフィ検査でしかわからない乳がんがあるということ。今回、当院で導入したのは、トモシンセシス撮影（3Dマンモグラフィ検査）が可能な最新鋭のマンモグラフィ撮影装置。撮影線量が従来比で大幅に少なく、また高精細な3D診断画像でより正確な診断が可能です。特に乳房に石灰化を認めた場合、組織の位置を詳細に把握でき、組織診（針生検）から確定診断に繋げやすいという点で優れています。当院ではこれま

でもマンモトーム生検を多く受け付けてきた実績がありますが、この装置の稼働により、微細石灰化病変の正診性を飛躍的に高められると確信しております。

治療の「個別化」と「創意工夫」

当センターで重要視しているのが、患者さん一人ひとりにマッチした「個別化治療」です。そしてそのために必要なのが、診療への創意工夫であると考えています。私は40年以上の医師生活の中で乳腺疾患の臨床と研究に30年以上従事しました。

また医師としてこれからという30歳後半に大腸疾患の診療・研究に約2年半にわたり携わりました。臨床と研究という異なるフィールドでの経験、また乳腺以外の領域での診療経験から学んだのは、部位が変われば体の見方も変わること、さまざまな知見あつてこそ治療への創意工夫が生まれるということです。今、多職種連携による診療が重要度を増していますが、やはりいろいろな方面から物事を見られる体制は強いと感じます。患者さんごとに病状はもちろん、年齢や希望される治療などは異なりますので、これまでの経験を生

かし、正確な判断とご安心いただける治療を進めていく所存です。

またもう一点、患者さんと向き合ううえで大切にしていることがあります。それは、ご縁を大切に、とことん誠実であること。病気を抱える患者さんは、自分の体の状態を知りたい思いと不安な気持ちで揺れています。常に心に寄り添いながら、現状をしっかりとご理解いただけるよう明確に言葉を尽くすことをモットーに診療にあたっています。

当センターの今後の展開としては、治療もさることながら、乳がん予防・早期発見に関する情報発信も重要であると考えています。日本の乳がん検診では2000年からマンモグラフィ検査が導入されました。ピンクリボン活動をはじめさまざまな啓蒙により認知度は上がっているものの、受診率は未だ50%未満の状態です。地域の先生方や住民の方に向けた情報提供、また患者さん同士の交流の場を設けるといった活動からも、地域の乳腺診療の発展に貢献できれば幸いです。

ぜひ当センターをお見知りください。ただ、乳がん疑いに限らず、妊娠時や出産後の乳腺異常など、乳腺疾患に関する疑問やお困りことがあれば

いつでもお声がけください。ご紹介いただいた患者さんは逆紹介に繋げ、どのような治療を行ったか詳細にお伝えします。ハイレベルな診療・密な病診連携・積極的な予防啓発を推し進め、これまで以上に当院が「安心して乳腺の診断・治療を任せられる病院」として頼っていただけのような努めてまいります。



乳腺センター

各職種が情報を共有しながら
それぞれの知識を生かし、
患者さんを囲む輪となって
継続的に最善の医療を提供します。





消化器系疾患に欠かせない

内視鏡について、より充実した

診断治療を提供します

今年度より内視鏡部の部長を務めております。高岡と申します。前職の附属病院(枚方)では消化器疾患の診断治療に従事していました。15年前までは建替前の当院に勤務しておりましたので、ご記憶くださっている先生がいらっしゃればうれしい限りです。私は胆道・膵疾患の内視鏡診断と治療を専門にしており、ライブワークであると自認しています。ERCP 関連治療(結石除去術、胆道ドレナージ術、ステント留置術など)の手法に関しては多くの経験を積み、一定の技術を有していると自負しています。超音波内視鏡(EUS)についても導入当初から携わってまいりました。

内視鏡機器と内視鏡手技は発展著しく、消化器疾患等の診断治療におけるその役割は年々大きくなっています。当院の内視鏡部では低侵襲な内視鏡による検査と治療を積極的に行っており、これまですでに大腸や上部消化管(食道・胃・十二指腸)の疾患について多くの患者さんを診療してきました。このたび、胆道・膵疾患を得意とする私に加わったことで、地域に役立てる分野が広がると思っています。専門領域を含めた消化器疾患を中心に、当院にある内視鏡機器を最大限利用した診療にあたっていく所存です。

さて、当院は規模こそ大きくはありませんが、その分小回りが効き、



一人ひとりの患者さんに対して臨機応変に対応できる点が強みだと考えております。内視鏡部では関連各科で密なカンファレンスを行っていますし、患者さんにチーム体制で寄り添うシステムを確立しています。またより高度な治療、特殊な内視鏡診断治療については関連病院である関西医科大学附属病院や関西医大総合医療センターと連携できる点も私たちの強みです。消化器系疾患の診断治療に悩みの患者さんがいらっしゃれば、ぜひ当院へご一報ください。

今後、世の中の状況を見ながら地域の先生方のもとへご挨拶にお伺いする予定です。お目にかかれた際には、地域医療の現状などお聞かせいただければ幸いです。地域の先生方と共に、寝屋川市周辺エリアの内科診療強化を実現できることを願っております。

New Professor 新任部長に聞く

profile

- 1986年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1988年5月 和歌山赤十字病院 第二内科 医師
- 1993年8月 関西医科大学 内科学第三講座 助手
- 2003年10月 関西医科大学附属香里病院(現・関西医科大学香里病院) 内科助手
- 2007年7月 関西医科大学附属枚方病院(現・関西医科大学附属病院) 消化器肝臓内科 准教授
- 2015年10月 関西医科大学附属枚方病院 消化器肝臓内科 教授
- 2021年4月 関西医科大学香里病院 内科部長、教授

関西医科大学香里病院
内科部長、内視鏡部 部長

高岡 亮

Makoto Takaoka



診療体制、サポート体制を増強。

地域密着型病院として

より良い在り方を模索し続けます



昨秋発行の「つなぐ12号」では、病院長に就任したご挨拶をさせていただきました。この1年間、新型コロナウイルス感染症対策に万全を期すとともに、病院の体制改革に努めてまいりました。特に力を入れてきたのが、地域の医療ニーズに鑑みた①病床再編②整形外科領域の強化、③内科医の増員です。①病床再編では療養病床を廃止し、回復期リハビリ病床と地域包括ケア病床へ転換。さらに4月には、北河内各医師会の支援もあり急性期病床を増床することができました。②整形外科領域の強化では、異なる専門を持つ医師を増員したことで従来よりも多くの手術を実施できています。③内科医の増員についても、内視鏡や消化器内科といった医療ニーズの高い治療を手厚く提供できる体制が整いました。さらにもう一つのトピックスとして、今年度より附属のケアプランセンターを院内へ移動しました。患者さんが入院される時から退院後の生活に関われる環境を整えたことで、在宅療養・社会復帰へスムーズに移行していただけるサイクルを構築できたと自負しております。

一方、実現が叶わず残念に思っていることがあります。それは地域の先生方との勉強会や、地域連携に関する意見交換の場を設けられなかったことです。病院長に就任してすぐ実

施したかったのですが、コロナ禍により未だ実現できておりません。当院は決して大規模な病院ではありませんが、地域密着型として地域医療に貢献できる診療環境と、より高度な医療を有する系列病院との緊密な連携があります。このメリットを地域の方々にもっとご活用いただくためにも、当院の機能や取り組み、ご紹介患者さんをごどのように逆紹介していくかなどを、ぜひ顔の見える交流の場でお伝えしたい。また病診連携にあたって、今以上に安心してお任せいただける存在となるには、先生方みなさんのご専門領域や得意分野、診療体制などはもちろん、当院へのご意見やご要望をお伺いする必要が、あると考えております。

院内の体制を整えた今、次の最重要テーマはこの体制をいかに地域の先生方との連携に生かしていくかです。引き続き当院のより良い在り方を模索しつつ、情勢が落ち着きましたら必ずや交流の機会を設けてゆく所存ですので、その折にはよろしくお願いたします。

Speciality Service 病院長に聞く

profile

- 1982年3月 関西医科大学 卒業
- 1982年5月 関西医科大学附属病院 研修医
- 1984年6月 田附興風会北野病院 内科 医員
- 1985年6月 関西医科大学附属病院 研究医員
- 1990年1月 関西医科大学 内科学第二講座 助手
- 1992年11月 カリフォルニア大学サンディエゴ校 Cardiology, Research Fellow
- 1999年5月 関西医科大学 内科学第二講座 講師
- 2001年6月 関西医科大学 内科学第二講座 助教授
- 2010年6月 関西医科大学香里病院 病院長
- 2018年4月 関西医科大学 医学部 理事長特命教授
- 2020年4月 関西医科大学くずは病院 病院長

関西医科大学くずは病院
病院長

高山 康夫

Yasuo Takayama



地域の先生方からの

声を逃さない、

医療ニーズに応える病院へ



地域医療連携課スタッフ

左から：寺井 美紀、阪口 朋子、吉岡 克治、尾崎 由美子、山口 恭葉、松岡 知佳

平素より地域医療連携課に格別のご高配を賜り、また運営にご協力いただきまして誠にありがとうございます。

当院は現在、高山病院長のもと様々な改革に取り組んでおり、私たち地域医療連携課も2021年1月に体制強化を図り新たなスタートを切りました。現在、相談員（メディカルソーシャルワーカー）3名、看護師1名、事務職2名のスタッフで運営しています。もちろん、主な業務は従来から変わりません。外来受診の予約調整や入院調整、緊急入院や緊急転

院への対応をはじめ、患者さんが退院する際の地域社会資源の紹介、療養で必要な種々の支援に関するご相談対応を行っています。当科のスムーズな対応が病院全体への信頼に繋がると心得て、日々の業務にあたっています。

地域に向けての当課の役割を考えると、地域医療との橋渡しとしての存在があり、使命としては地域医療との密な信頼関係から地域医療の発展に寄与していくことです。ご紹介から逆紹介までを迅速に進めるためにも、今後さらに医療機関の先生方

やスタッフの方々とのコミュニケーションを充実させたいと考えております。当院へ安心してご紹介いただけるよう、今まさに変化を迎えている当院の情報提供に努めるとともに、地域の先生方のお話やご要望をお伺いしてまいります。そしてお伺いした内容は各診療科に届け、地域ニーズにお応えできる病院づくりに努めます。

現在、情勢を見ながら、病院長と共に地域医療機関の先生方にご挨拶へうかがう準備を進めています。当院の症例などを紹介する機会も設け

てまいりますので、ぜひご注目ください。また当院では昨年より整形外科領域の強化を進めています。そういった当院の特徴についても、消防隊や救急隊の方々に向けてご紹介する機会を企画しております。地域の皆さまが安心して医療を受け、何でも相談できるようスタッフ一丸となって取り組んでまいりますので、引き続きご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

Speciality Service 地域医療連携課

関西医科大学くずは病院
地域医療連携課
課長

吉岡 克治

Katsuhiro Yoshioka



在宅での暮らしを支える

スペシャリストとして、

地域福祉に貢献し続けます



ケアプランセンター・くずはでは、介護や支援が必要な方に向けて、住み慣れた家、暮らし慣れた地域で自立した生活ができるよう、介護サービスと医療サービスを組み合わせたケアプランを作成し、支援しています。私たちの業務は、利用者様のかかりつけの先生方との連携が欠かせません。利用者様の口頃の様子をお伺いしたり、助言をいただいたりといつもお力をお借りしておりますこと、改めてお礼申し上げます。

2021年4月、当センターは関西医科大学くずは病院の1階に事務所を移転しました。相談窓口が近くなったことで、外来患者さん、入院患者さんから介護相談をいただく機会が多くなり、移転から数カ月ですでにご相談件数が倍増しています。また以前より訪問介護や訪問看護など、同じくくずは病院を母体とする併設施設との連携を強みとしておりましたが、病院の職員やコメディカルスタッフとの距離も近くなったことで、さらにスムーズな支援が可能になりました。移転を機に、必要とされる方に役立つセンターとして一つステップアップできたのかなと嬉しく感じています。

当センターの利用者様の多くが、日常生活動作（ADL）の低下、介護認定の申請など心身の変化を受けて帰宅される方です。特に初めて発症

し、急性期治療よりハビリを経て帰宅される方は、発症前まで自分でできていた動作がままならないことも多く、退院後の生活に大きな不安を抱えています。不安や悩みが大きい方々に対し、自宅に戻ってからの暮らしについて時間をかけて関われることに、スタッフ一同、大きなやりがいを感じながら日々の業務に臨んでいます。これからも従来の在宅でお過ごしの高齢者への対応と合わせ、周辺地域の様々な社会資源と繋がりながら、地域福祉に貢献していけるよう努めてまいります。利用者の方々の生活をお手伝いできる喜びを胸に、安心して頼っていただける存在であるよう、さらに質の高いケアを目指します。



ご相談件数の増加に伴いスタッフを増員しました。現在5名で運営中、今後も体制の増強を予定しています

Speciality Service 関医ケアプランセンター・くずは

関西医科大学くずは病院
関医ケアプランセンター・くずは 管理者
主任介護支援専門員、介護福祉士

杉原 友樹

Tomoki Sugihara





健康な生活への

前向きな一歩を後押しする、

より魅力的なクリニックへ

医師になって以来、これまでずっと臨床の現場に身を置いて、消化器内科分野、中でも消化管疾患の患者さんを中心に担当してきました。今回、ご縁があつて予防医療に携わることになりましたので、ご挨拶申し上げます。当クリニックでは健診の診察に加え、上部消化管の内視鏡検査に従事しております。

これまで臨床での診療業務では、体の不調について訴えや不安のある方、また健診などで異常を指摘された方々を診る日々でした。今後は特に自覚症状のない方々から異常を見

つける、あるいは今後発病する可能性が高い予備軍を見つけ出し、発病を予防することに力を注がなければならぬと考えています。例えば健診で急性疾患や悪性疾患が見つかった場合、すぐに病院で受診される方は多いですが、しかし血圧がやや高い、コレステロールがやや高いなど慢性疾患未達の自覚症状がない場合、受診者ご自身がその状態を「なんとなく」放置されることが多く、これは問題だと考えています。車と同じように、体も定期的にメンテナンスすれば快適な状態で長く過ごしていけますし、そのメンテナンスとは日常生活の改善で叶うことが多々あります。少しの異常も放置せず、自分の体と丁寧に向き合っていただけのように、前向きな啓発、提案ができるよう努めたいと考えています。

昨年はコロナ禍を受け、いわゆる「受診控え」による病気の発見の遅れが懸念されておりました。しかし一方で、コロナ禍の影響により日本人の健康志向はさらに高まってきています。人間ドック健診を受診する方々のニーズも、今後ますます多様化することは想像するに難くありません。これまで当クリニックは50年の長きにわたり人間ドック健診を行ってまいりました。今後も受診者の方にとってより魅力ある健診メニューを提供できるように、そしてそこから

円滑に予防医療へ繋げられるクリニックへと進化するため、微力ながら尽力していく所存です。



New Professor 新任医師に聞く

profile

- 1989年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1989年6月 関西医科大学 麻酔科学講座 入局
- 1992年11月 関西医科大学附属香里病院第1内科入局
- 1996年5月 関西医科大学附属香里病院(現・関西医科大学香里病院)第1内科 助手
- 2006年1月 関西医科大学 内科学第三講座 助手
- 2010年6月 関西医科大学香里病院 内科 診療講師
- 2021年4月 関西医科大学天満橋総合クリニック 内科

関西医科大学天満橋総合クリニック
内科

大宮 美香

Mika Omiya



■ 関西医科大学附属病院

TEL.072-804-0101(代)
<http://www.kmu.ac.jp/hirakata/>
 〒573-1191 大阪府枚方市新町2-3-1
 地域医療連携部 病診連携課(地域医療センター事務局)
 TEL.072-804-2742 FAX.072-804-2861

■ 関西医科大学総合医療センター

TEL.06-6992-1001(代)
<http://www.kmu.ac.jp/takii/>
 〒570-8507 大阪府守口市文園町10-15
 地域医療連携部 病診連携課
 TEL.06-6993-9444 FAX.06-6993-9488

■ 関西医科大学香里病院

TEL.072-832-5321(代)
<http://www.kmu.ac.jp/kori/>
 〒572-8551 大阪府寝屋川市香里本通町8-45
 地域医療連携部 病診連携係
 TEL.072-832-9977 FAX.072-832-9988

■ 関西医科大学くずは病院

TEL.072-809-0005(代)
<http://www.kmu.ac.jp/kuzuha/>
 〒573-1121 大阪府枚方市楠葉花園町4-1
 地域医療連携課
 TEL.072-809-0013 FAX.072-809-0022

■ 関西医科大学天満橋総合クリニック

TEL.06-6943-2260(代)
<http://www.kmu.ac.jp/temmabashi/>
 〒540-0008 大阪市中央区大手前1-7-31(OMMビル3階)
 TEL.06-6943-2260 FAX.06-6943-9827

